

本を読む人のための

書体入門

正木香子



表情が変われば**書体**も変わる

ゴシック体
(TBゴシック)

本を読む人のための書体入門

正木香子

ゴシック体
(TBゴシック)

星海社

サンセリフ体
(Futura)

40



夏目漱石

『吾輩は猫である』

明朝体

(イワタ明朝体オールド)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡惡な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。然しその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが有つたばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始であらう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるしてまるで薬罐だ。その後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。加之顔の真中が余りに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと烟を吹く。どうも烟せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む烟草というものである事は漸くこの頃知つた。

夏目漱石
『吾輩は猫である』
ゴシック体
(中ゴシックBBB)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡惡な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。然しその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが有つたばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるしてまるで藥罐だ。その後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。加之顔の真中が余りに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと烟を吹く。どうも烟せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む烟草というものである事は漸くこの頃知つた。

夏目漱石
『吾輩は猫である』
行書体
(角新行書)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頼と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番穢悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。然しその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが有つたばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始であらう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるしてまるで薬罐だ。その後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。加之顔の真中が余りに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと烟を吹く。どうも烟せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む烟草というものである事は漸くこの頃知つた。

夏目漱石
『吾輩は猫である』
ファンシー書体
(メガ丸)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頼と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここ始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。然しその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかつつた感じが有つたばかりである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つてゐる。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるしてまるで葉罐だ。その後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出会つた事がない。加之顔の鼻中が余りに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと烟を吹く。どうも烟せばくて実に弱つた。これが人間の飲む烟草というものである事は漸くこの頃知つた。

はじめに

突然ですが、この書体の名前を知っていますか？

そう、今、あなたが本のページをひらいて読んでいるこの文字です。

名前なんて知らない、考えてみたこともない、という人がほとんどかもしれませんね。
本来、書体とはそういうものだと思います。

編集者やデザイナーでなかったら知る必要もないし、知らなくても誰かに咎められるような知識ではありません。

でも、私は気づいてほしいのです。

漱石が猫の視点を借りて人間社会を描いたように、たとえば名前で呼ぶことがなくても、その存在を忘れていても、本を読む人にとっては「書体」がもうひとつの目になっているということ。

みなさん、はじめまして。正木香子まさき きょうこと申します。

私は三年ほど前、ふとしたきっかけから「文字の食卓」(<http://mojisyoku.jp/>)というウェブサイトをつくろうと思い立ちました。

心に残っている本の中の言葉には、どんな書体がつかわれていたのか、实例を取りあげ、世界にひとつだけの「書体見本帳」をつくろう、と。

そんなふうに自己紹介をすると、きっとデザイナーなんだな、と思われるかもしれませんが、そうではありません。文字について研究している専門家でもありません。

私の肩書きは文筆家ですが、私は自分のことを「文字食しよく」と呼んでいます。

「文字」を「食べる」人、言葉を味わう人、という意味です。

「文字の食卓」では、一読者から見た文字の印象を「食」になぞらえ、味わい深い、滋味み豊かな書体を紹介してきました。

そのウェブサイトがご縁となって、出版業界の第一線にいるデザイナーの方々とお会いする機会もできたのですが、現場のプロフェッショナルである彼らにいちばんよく言われたのは、「(仕事でもないのに) 書体を見分けているなんてすごい」ということ。

そう言われて驚いたのは私の方です。

読者には見分けがつかないと思っているのなら、どうして世の中にはこんなにたくさん
の書体があふれているんだろう？

その中からどうやって、書体を選んでいるんだろう？

そして、そのたびに、すこし申し訳ないような、その言葉を言わせてしまったのは、
他でもない自分自身のような気持ちになりました。

私は何十年も本を読んできたけれど、本が好きだと言ったことはあっても、「書体」が
与えてくれた感動を言葉にしたことは一度もなかったのですから。

私たちが普段、本や広告、テレビやインターネットなどさまざまな場所で目にしてい
る文字は、とても身近な存在なのに、その実際について読み手に届く情報は驚くほどわ
ずかです。

考えてみればおかしいことですし、別に誰も秘密にしているわけではないと思います
が、優れた書体というものは水や空気のような存在であるべきだという考えが、昔から

ゴシック体
(TBゴシック)

作り手の側にあったことも、情報が少ない理由のひとつかもしれません。

実をいえば、私だって、それまで書体の名前をほとんど知りませんでした。

しかし「文字の食卓」に文章をかくために、書体について調べれば調べるほど、それらがどのようにして生まれたのかを知れば知るほど、自分のすぐそばにこんな発見に満ちた世界があったのだという事実に胸を打たれ、新しい疑問が次々とわいてきました。

書体ってなんのためにあるんだろう？

文字の「味」ってなんだろう？

現在は、パソコン一台さえあれば、デザインから印刷まで、たったひとりでもできてしまう時代です。デザインにはまったく興味が無いという人でも、ワープロやパソコンの普及によって、「書体（フォント）を選ぶ」という行為は、日常的な経験になっています。ミニコミやリトルプレスといった自主制作の出版物が過去にないほど人気なもの、見栄えのいい、商品価値の高い本を個人でつくれるようになったからでしょう。

書店に並んでいる本の物質的な価値が、同人誌とあまり差がなくなってきたのではな

いか——。そんな生意気なことを言ったら、編集者におこられてしまうかもしれません。本が売れるかどうかは、見栄えではなくコンテンツ（内容）の問題だ、と。

まさしくその通りでしょう。

本の内容を伝えるために欠かせない言葉は、文字からできています。その文字をあらわす書体もまた、「コンテンツ」をかたちづくる重要な要素のひとつなのです。

約30年前、日本にアップルコンピュータが登場したとき、たった2種類しかなかった和文フォントの数は、いまや3000種類以上とも言われます。ネットの海を見渡せば、無料でダウンロードできるフリーフォントや絵文字がいくらでも転がっています。

そのような状況は一見すると大きな進歩のようですが、一方で、失われてしまったものもあると私は思います。

たとえばかつて、学校で記念文集をつくったり、新聞や雑誌に投稿が載ったりするとは特別な意味をもっていました。今の20代、30代は、「活字になる」という言葉にこめられた晴れがましさを記憶している最後の世代なのかもしれません。

文字は、もちろん、言葉を視覚化するためのものです。

しかし私は、文字というものは、ほんとうは言葉では説明できない何かを伝えるためにあるのだと考えています。その効果を目に見える数字であらわすことができないからこそ、評価が難しい。

年月を重ねて、味のあるものに価値を見出す人はたくさんいるけれど、書体についてはなぜか見過ごされているというのは、とても残念なことです。

フォントはタダで当たり前。時間をかけて丁寧につくられた書体は高く敬遠される。そんな価値観が普通になってしまえば、結果的に日本のすばらしい文字表現の文化は衰退してしまうでしょう。

モノを「作れば売れた」という時代ならともかく、合理化や効率化を求める社会がこのままどんどん進んでいったら、文字はしよせん記号でしかないのだから、たったひとつの書体があれば足りるじゃないか、ということになりそうです。

しかし書体の価値を伝え、その価値を読み手が納得できれば、技術は変わっても優れ

た書体を受け継いでいくことができます。文字のエンドユーザーは、間違いなく読み手自身なのですから。

そこで、誰もがもっと気軽に文字のことを話せるようになってもらいたい、書体について興味をもってもらいきっかけになれば、という思いから、この本が生まれました。

本書はデザインのノウハウを学ぶための入門書ではありません。

難しい専門用語もいっさい出てきません。

文字の長い歴史を振り返れば、ほんとうに小さな入り口に過ぎないかもしれませんが、この本を手にとった一人でも多くの方と、本を読むよろこびをより深く共有できることを願っています。

文字、書体の魅力を知り、自ら楽しむこと。

そうすれば、文字の食卓はもっと豊かになる。私はそう信じています。

「書体なんてどれでも同じ」

そう思っている方こそ、何気なく目にしていた文字の印象が変わることでしょう。

目次

はじめに 11

第二章 文字の名前は知らなくても 21

書体とは、目に見えない心の動き 22

ホラー書体は「いつ」誕生したか？ 26

巨大コンテンツ産業が生み出した文字表現 33

書体と日本人の感受性 38

記号か、芸術か 43

「記憶を読む」ということ 47

「水曜どうでしょう」に見る文字の伝染性 54

文字の「味」が生まれる三要素とは 61

第二章

誰もが自分の書体を持っている 83

コラム1 朝日新聞明朝（新聞書体） 70

コラム2 ニューシネマ（映画字幕書体） 74

コラム3 クラフト墨（ファンシー書体） 78

書体と小説の密やかな関係 84

読書という身体運動 94

文字の喰わず嫌い 99

生まれて初めて出会う文字 104

誰もが自分の書体を持っている 107

書体を見分ける力はどうやって育つか 115

ローマ字入力が日本人の読書を変えた 123

コラム4 秀英明朝（明朝体） 130

コラム5 たおやめ（かな書体） 134

コラム6 丸明オールド（明朝体） 138

第三章

おいしい文字がある暮らし 143

活字は……カワイイ？ 144

文字に宿る詩情 151

余白の宇宙 162

正方形から始まる書体デザイン 168

デジタルフォント時代の「贅沢」とは 175

「文字育」のすすめ 180

文字で思いを分かち合う 183

コラム7 ツルコース（カナモジ） 188

コラム8 石井中明朝体（明朝体） 192

コラム9 こぶりなゴシック（ゴシック体） 196

あとがき 201

第二章

文字の名前は知らなくても

ゴシック体
(TBゴシック)

ゴシック体
(TBゴシック)

書体とは、目に見えない心の動き

みなさんは、この言葉（図1）を読んで、まずどんな場面を想像しますか。

緊張気味の転校生に声をかけた優しいクラスメイトの一言かもしれません。ひよっとしたら恋人たちのロマンティックな会話かもしれません。

……でも、なんだか、ねえ。

そう思った方は、ちよつと不気味だと感じたのではありませんか。

私は、なぜか見てはいけないものを見てしまったような、生理に訴え^{うった}かけてくるような怖さがあると思います。

すこしもおそろしいことが書かれているわけではないのに、ふしぎですね。

当たり前のことですが、普段、私たちは「このフォントは何か」を考えながら本を読んでいるわけではありません。一つひとつの字のかたちに目をとめていたら、文章を理解することなどできません。

それでいて、改めて考えることがなくても、さまざまなことを感じながら文字を読ん

ハルチニグコドム……

1

でいる。

何かを感じるといふことは、つまり、違いがわかるということ。

それは単純に字形を識別して、別々のものだところとただではありません。たとえば「あ」と「ぁ」という字は、目に見える姿は異なるけれど、どちらも同じ音を意味する文字であるというルールを暗黙のうちに了解しています。

どうしてそんなことができるのかというと、人間が想像力を持っているからです。想像力が視覚を補い、文字認識を助けているのです。

そのときおこっている、目に見えない心の動き、文字の印象を生む違いのことを、この本では「書体」と呼びたいと思います。

さて、これは「**淡古印**」^{たんこいん}といつて、一般的に、マンガのホラー書体として知られている書体です。

「ホラー書体」とは、その名の通り、恐怖感やおどろおどろしい雰囲気を出す文字のこと。言われてみればそんな気がする、と感じる人は多いのではないだろうか。

ところが、この書体のどこが怖いのかをいざ説明しようとする、誰もうまく言葉にすることができない。これはいったいどういうことなのでしょう。

実はこの書体、そもそも「ホラー書体」として誕生したわけではありません。

本来は、70年代の終わりに、印章業界、つまりハンコ屋さんに向けて開発された書体なのです。図2のように、落款^{らっかん}や社印、表札などにもよくつかわれています。

一見、ホラーとはなんの関係もないように思える「ハンコの文字」がなぜ、ホラー書体として広まったのか？
誰がそんなことを最初に思いついたのか？

文字ってなんだろう、という問題を考える前に、まずそんな話から始めたいと思います。

京都・夏の詩

謹賀新年

いざよと
酒まじり

成雅
堂印

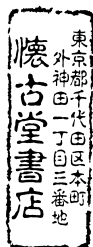


図2 『写研1984年60号』より

ホラー書体は「いつ」誕生したか？

「淡古印」が初めてマンガというメディアに登場したのは1984年、「週刊少年ジャンプ」の51号でした。

それはあの国民的な人気マンガ『ドラゴンボール』（鳥山明）の記念すべき連載第1回目。しかもいきなり冒頭のコマ（図3）につかわれています。

当時の「週刊少年ジャンプ」はすでに発行部数300万部を超える人気の少年マンガ誌であり、社会現象となった『Dr.スランプ』（鳥山明）をはじめ、『キャプテン翼』（高橋陽一）や『キャッツ・アイ』（北条司）、『キン肉マン』（ゆでたまご）、『こちら葛飾区亀有公園前派出所』（秋本治）、『北斗の拳』（武論尊／原哲夫）など、挙げればキリがないほど多くの人気作品が連載されていました。

そんなときに始まった『ドラゴンボール』は、まさに鳴り物入り、待望の新作ですから、読者に強いインパクトを与えたい、他の競合誌とはちがう個性的な誌面をつくりたい、という編集部の意気込みが、それまでにない書体の工夫という点にもあらわれているのかもしれない。

権利上の都合により掲載不可。
本をご覧ください。

『ドラゴンボール』の爆発的な人気も追い風となつて、「週刊少年ジャンプ」の発行部数はその後さらに大きく飛躍していくこととなります。

しかし、**図3**をよくごらんください。この時点ではまだ、いわゆる「ホラー書体」とはすこしちがっているように思えます。

『西遊記』をモチーフとした舞台設定や、「**むかしむかしのこと**」という書きだし、古文書風の飾り枠からもわかるように、この書体を選んだのには、おそらく単純にアンティークな味わいを出したいという編集者の意図があったのでしょう。

同じような「**淡古印**」の使用例は、それ以前の広告でもすで見ることが出来ます。たとえば**図4**では、アンティークなイメージだけでなく、「日本ではない、どこか遠くの国から伝わってきたもの」というイメージとも一致していることがわかります。

このように、書体によって文字表現に個性や変化を与えろという手法は、もともと広告の分野で始まったものです。

その背景には、70年代から80年代半ばにかけての創刊誌ブームがありました。

それまでは活版印刷^{かっぱん}所の職人がつくっていたような雑誌や書籍などの印刷物に「グラフィックデザイナー」と呼ばれる職業の人々が進出し、「タイポス」や「ナール」をはじめとする、従来の活字にはない個性をもった「デザイン書体」が次々に生まれた時代です。

一方、同じころ開発された新書体の中でも、「淡古印」はどちらかといえば地味な存在。ごく限られた用途の書体だと考えられていました。

ところが蓋^{ふた}をあけてみれば、広告や雑誌、マンガのふきだしなど、あらゆるジャンルの印刷物で「淡古印」が多用されたことは、開発側の思惑^{おもわく}を大きく超えるものだったといえます。

『ドラゴンボール』連載初期のころ、この書体はいわば「狂言回し」のような役割を与えられていました。

淡古印

私の場合、
加加阿と木乃実と粘体状にして
丹念に練りあげる
馨しいこの風味こそ
吹羅巴の伝統
ジャンデューア
初めて知る半生の円やかさ
贈古齡糖の贅沢

ウーレン ジャンデューア
1994

内本古内食品
1994

私の場合、
Heineken
For Me, It's Heineken.

カネボウの新製品の広告。「ジャンデューア」

「ハイネケン」キリンビール

『写研 1984 年 60 号』より 図 4

アクションの多い少年マンガにしてはめずらしい趣向ですが、毎回、最初と最後のページに顔の見えない語り手（作者の声）があらわれて、週刊誌読者の期待と緊張を煽るような言葉が出てきます。

「ジワジワと近づく不気味な影の正体は……」

「はたして勝負の行方はいかに？」

といったような具合です。

結果的に、先の読めない展開、手に汗にぎる場面の多くで「淡古印」が用いられたことは、この書体にとって、重要な意味をもつ偶然だったと私は思います。

「摩訶不思議」で「奇想天外」な大冒険とともに、作中におけるこの書体のイメージも、次第に、そして確実に変化していったのです。

「古風な文字」から「緊迫感の漂う文字」へと。

そして、この書体の持ち味に作品中で決定的な変化があらわれるのは、連載開始から約三年後、恐怖の大魔王が宿敵として登場したときのことです。図5のシーンでは、「怖

権利上の都合により掲載不可。
本をご覧ください。

鳥山明『ドラゴンボール』12巻／集英社／1988年 図5

い言葉にマッチする」だけではなく、「なんでもないような言葉がなぜか怖く見える」という、ホラー書体の本領が発揮されています。

しかし、このときもまだ世の中に「ホラー書体」というものが存在していたわけではありません。正確には、そこに「ホラー書体」がすでにあるのに、誰も気づいていなかったというべきでしょうか。

心霊や妖怪をモチーフにしたマンガやオカルト関連の書籍、テレビ番組の怪奇特集などで「**淡古印**」が定番となるのは、90年代に入ってからのことです。

たとえば、1990年に放映が始まった「世にも奇妙な物語」のタイトルロゴ(図6)はオリジナルですが、「**淡古印**」独特のかすれやにじみを強く意識して加工されていることがわかります。

つまり「ホラー書体」とは「物」の名前ではなくて、発明された「概念」ではないかと考えることができます。

その発明は、誰かひとりの天才的なひらめきで突如生まれたものではありません。発明者はどこにもいない、ともいえるし、数えきれないほどたくさんの方々の共同発明者がいる、ともいえるわけです。

極端な言い方をすれば、『ドラゴンボール』が初期のコメディ路線のままで終わっていたなら、ひょっとすると「世にも奇妙な物語」のタイトルロゴはまったくちがうかたちになっていたかもしれない。

もちろんこれはひとつの仮説に過ぎませんが、少なくとも、書体のもつイメージというのは、あらゆるメディアが互いに影響しあっている、全てがどこかで連鎖している、そんな気がします。

巨大コンテンツ産業が生み出した文字表現

「淡古印」がいつごろからマンガでつかわれるよう



『世にも奇妙な物語』フジテレビジョン 図6

になったのかを知るために、マンガ誌のバックナンバーを調べていたら、ふしぎなことに気がつきました。

70年代のマンガ誌に使用されている平均的な印刷用書体の数（広告ページを除く）は、たった5種類程度しかないのです。

なんでそんなことがふしぎなんだ、と、もつと上の世代の方なら笑うかもしれませんね。

高度成長期を迎えた60年代から70年代には、水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』に始まり、^{うめず}楳図かずおの『漂流教室』、つのだじろうの『恐怖新聞』など、いわゆる恐怖コミックと呼ばれるジャンルが流行した時代があります。しかし、それらの作品がマンガ誌に発表された当時は、題字や擬音の手描き文字がわずかに見られる程度で、「**淡古印**」のような既成のホラー書体はまだ存在していませんでした（90年代以降の復刻版では使用されていることがあります）。

それが80年代の半ばになると一気に15書体前後に増え、さらに史上最高の発行部数653万部を記録した「週刊少年ジャンプ」の1995年3・4号では、なんと約40種類

ものの書体が用いられています（興味深いことに書体数の増加と発行部数のピークとはほぼ一致しています）。

そんな複雑極まりないものを、毎週、数百万人もの人々がなんの違和感もなく受け入れて読んでいた、という事実は、改めて考えると驚くべきことではないでしょうか。

登場人物のセリフを暗記するほど『ドラゴンボール』に夢中になった世代は、物心がついたときから豊富な多書体の文化で育った、初めての子供たちなのです。

筆者もまさにドラゴンボール世代のど真ん中ですが、子供のときから当たり前のように目にしているさまざまな書体が、いつからあるのか、どのようにして生まれたのかなんて、まったく考えたことがありませんでした。

しかし、現在のように世の中の印刷物で多くの書体が扱われるようになったのは、実は意外に最近のことなのです。

マンガにおける文字表現が80年代に入ってから急速に発達していった要因には、アニメやゲームなどのメディアミックスが関係していると言われます。

特に『ドラゴンボール』は、『Dr.スランプ』での実績もあり、週刊誌での連載が始まる前からアニメ化が内定していたことで有名です。

「週刊少年ジャンプ」に限らず、当時相次いで創刊されたマンガ誌は人気連載を次々に映像化し、大ヒットを生み出してきました。

たとえばモノログ風のツツコミが画期的だった『ちびまる子ちゃん』、子供たちの間でモノマネが大流行した『クレヨンしんちゃん』、テレビ中継の実況が試合展開のポイントになっていた『YAWARA!』など。

権利上の都合により掲載不可。
本をご覧ください。

浦沢直樹『YAWARA!』16巻／小学館／1990年

それらの作品の中では、人物の声音や喜怒哀楽の心情に合わせて書体を使い分けるという手法が積極的に取れ入れられ、細

権利上の都合により掲載不可。
本をご覧ください。

図7

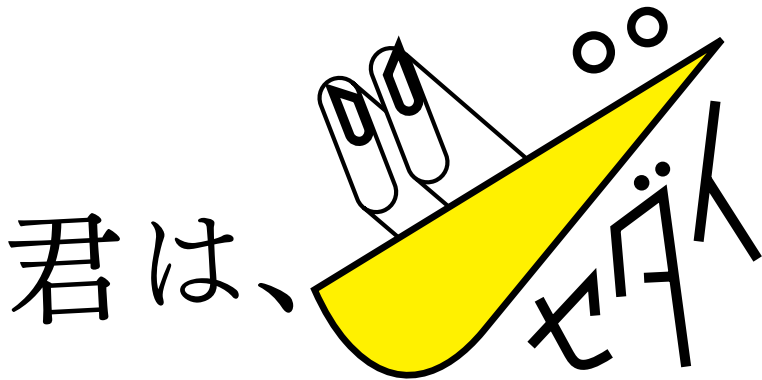
臼井儀人『クレヨンしんちゃん』10巻／双葉社／1995年

さくらももこ『ちびまる子ちゃん』4巻／集英社／1989年

権利上の都合により掲載不可。
本をご覧ください。

かい場面設定に合わせた書体が用いられています。

キャラクターがマンガ作品の中だけでなくさまざまなメディアで成長し、より身近な存在として愛されることで、「装飾」としての文字ではなく、「声」としての文字が強く意識されるようになったのです。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ イベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、
未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。
各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!